

文亦云、野狗、爾雅疏引字林云、野狗似狐、黑喙皆是野干字。○廣韻云、狐、貉、說文曰、妖獸也、鬼所乘有三德、其色中和、小前豐後、死則首丘、與此不同、按、太平御覽引玄中記云、百歲狐爲美女、孫愔至百歲化爲女之說、蓋本之陶弘景曰、狐形似狸而黃、亦善能爲魅、蘇敬曰、鼻尖似小狗、惟大尾、全不類狸、

〔翻譯名義集〕

悉伽羅

此云野干、似狐而小形、色大黃、如狗、群行、夜鳴、如狼、郭璞云、射干能緣

得、僻處、睡息、不覺、夜竟、惶怖、無計、慮、不自免、住則畏、死、便自定、心、許、死、在、地、衆人來見、有、一人、云、野干、其耳、言已、截去、野干、自念、截耳、雖痛、但令、身在、次、有、人、云、我須、其、心、尾、便復、截去、復有人見、有、一人、云、野干、亦復、如斯、生、不修、行、如失、其、頭、無活、路、即從、地、起、奮其、智力、絕踊、問、關、遂得、自濟、行者、之、心、求、說、苦難、云、狐、是、獸、一、名、野干、多疑、善聽、顏師古注、漢書曰、狐之爲獸、其性多疑、每渡河、水且聽、且渡、故言疑者、而稱狐疑、述征記云、北風勁、河冰合、要須、狐行、此物善聽、冰下無聲、然後、過河、說文云、狐、妖獸也、鬼所乘、有三德、其色、中和、小前、大後、死則、首丘、郭氏玄中記曰、千歲之狐、爲媼、婦、百歲之狐、爲美女、然法華云、狐、狼、野干、似、如、三、別、祖、庭、事、死、野干、形、小尾、大、狐、即、形、大、禪、經、云、見、一、野、狐、又、見、野、干、故、知、異、也、

〔類聚名義抄〕

狐

音胡、キツ子、野干、クツ子、

〔下學集〕

狐

多疑之獸也、古之媼婦、野干

〔八雲御抄〕

狐

おい わか ひる 小 ふる 又きつと云きつにはめなでといへり

〔東雅〕

狐

キツネの義不詳、此俗にも狐を呼て、野干といふ事、こゝに出でしと見えたり、(中略)キツネとは、キは奥なり、五辛菜をすべてキと

〔倭訓栞〕

狐

狐をいふ、きつにともいふ、伊勢物語のきつにはめなでを、花鳥物語には

きつねはめなでと書り、又万葉集に、狐にあむさむはきつとばかりもいへる也、けつねともいへり、靈異記にきつ寝よといふは舊き説なれど心得がたし、きは黄也、つは助辭、ねは猫の略なるべし、俗に狐を野干とす、佛經に射干と見えて、狐とは異れり、字彙に、野干、似狐而小、出胡地といへり、源氏に、きつねのすみかといへるは、文集に、狐隱蘭菊叢といへる是也、大和添上郡眉間寺の西北に、七疋狐といふ所あり、聖武天皇母公の陵の地にして、立石に、狐杖をつき、踊る形を造る、も